

世界腎臓デー (3/13) に寄せて

医療法人 たいようのクリニック 宮平 健



この度上記について執筆依頼があり、自由に書いていい、ということでしたのでお受けしました。2つのことについて書きたいと思います。なぜ私が腎臓内科医・透析医になったのか、そして現在診療している北部地域の透析医療の現状について書きたいと思います。

平成5年自治医大を卒業し、県立中部病院で2年の初期研修を終え離島へ赴任しました。1日20人程度の外来診療であり、時間を持て余していました。同期は後期研修を受ける人もおり、実力差がつくのに不安・焦りがありました。しかし、技術は劣っても知識だけは負けたくないと思い、本島に出るたびに考文堂に行き、医学雑誌を2～3万円分購入し離島で勉強していました。その時に1冊の本に巡り会いました。透析の本です。初期研修ではネフログループを回ることがなかったので、透析とはどういうものなのか分からなかったので、勉強したいと思い購入しました。その中で人は心不全、呼吸不全、肝不全で死んでも腎不全では死なない、2つの腎臓が無くても人は透析医療で何年も生きられる、という事実を知り、透析医療に大きな魅力を感じ、深く勉強したいと思いました。そして後期研修は中部病院でネフログループに所属させていただき、研修を受けました。

当時のネフログループの上司である上原元先生（元中部病院院長）、砂川博司先生（現すながわ内科クリニック院長）、比嘉啓先生（現首里城下町クリニック第二院長）に御指導いただき、また同僚の宮里昌先生（現みやざと内科クリニック院長）、宮里均先生（現南部医療センター・こども医療センター）、糸数昌悦先生（現那覇市立病院）に巡り合い、今までの医師

人生の中で最も楽しい1年を過ごすことができました。

その後は腎臓専門医、透析専門医を取得し、かねてからの希望であった県立北部病院に勤務することができました。5年勤務したあと、縁あって平成21年に透析を有する内科診療所、「たいようのクリニック」を開業しました。

この数年、北部地域で透析を受けたいという患者がいるにも関わらず、各透析施設の事情で受け入れてきていない現状があったため、2年前に北部地域の透析医療の現状を明らかにすべく、アンケートを行いました。このアンケートにより、色々なことが分かりました。

スタッフが充足すればたくさんの透析患者を受け入れることができる施設があること、北部地域は面積が広大なため、透析患者の送迎に多大な負担が施設にのしかかっていること、北部地域の金武町・宜野座村・恩納村から中部地区にたくさんの透析患者が通院していること、また北部地域の透析患者の独居率は25.7%という事実がわかりました。他地域にはない、北部地域の大きな問題と考えます。

最近になり全国的に新規透析導入患者数が減少してきていますが、いくつかの要因が考えられます。CKDという概念が一般市民にも浸透し、早期発見できるようになったこと、CKDの医療連携が進んできたこと、SGLT2阻害剤などの腎保護作用のある薬剤が専門医だけではなく、一般医家でも使用されるようになってきたこと、などが考えられます。

将来はiPS細胞から腎臓が作られ、我々透析医が失業する時代が来ることを願っています。